

# 日・中・韓における動物観の比較研究（要旨）

## Comparative Study of Human Views on Animals in Japan, China and Korea

小林 信一<sup>1)</sup>、小泉 聖一<sup>1)</sup>、福澤 めぐみ<sup>1)</sup>、汪 斐然<sup>2)</sup>、徐 美朗<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 日本大学生物資源科学部動物資源科学科、<sup>2)</sup> 日本大学大学院生物資源科学研究科

Shinichi Kobayashi<sup>1)</sup>, Seiichi Koizumi<sup>1)</sup>, Megumi Fukuzawa<sup>1)</sup>, Feiran Wang<sup>2)</sup> & Mirang Seo<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> College of Bioresource Sciences, Nihon University, <sup>2)</sup> Graduate School of Bioresource Sciences, Nihon University

キーワード：動物観、比較研究、日中韓

Keyword: human animal views, comparative study, Japan, China, Korea

### 1. 研究の背景

中村禎里著「日本人の動物観」では、昔話における変身譚を素材として、西洋では人間と動物の隔絶観（支配・被支配関係）が明確であるのに対して、日本人は人と動物が隔絶した存在ではないとする動物観を持っていると結論付けている。こうした日本人の動物観あるいは自然観から、人間が自然や野生動物をコントロールするという考えには違和感を持ち、愛玩動物に対しても家族の一員や友達といった意識を強め、結果として主従関係を曖昧にし、問題犬を生み出す遠因となっているとも考えられる。

### 2. 研究の目的と方法

本研究では、同じ東アジアに位置している日本・中国・韓国が同様な動物観を持っているのか否かについて、またそれが現在の愛玩動物との関係性にどのような影響をもたらしているのかを分析・検討することを目的としている。

本研究は、以下の3部で構成されている。①日中の昔話の比較による動物観の相違を検討すること、②3国の一般市民を対象とした輪廻、特に動物との輪廻について分析すること、③同じ調査によって、一般市民の動物、特に愛玩動物に対する意識の相違性、相似性を検討することである。

アンケート調査は、2011年7月から9月の間に、日本、韓国の首都圏および中国の北京市において、一般人を対象者に留置法によって実施し、日本595件、中国307件、韓国300件の有効回答を得た。その結果を、国別、男女別等に分類し、t検定、 $\chi^2$ 二乗検定などを用いて比較検討を行った。

### 3. 結果と考察

#### 3.1. 日中の昔話からみた動物観

分析の対象として、日本は「日本昔話大成」角川書店（1979年5月）、中国は「中国神话与民间传说」（中国神話と昔話）中国华侨出版社；第1版（2011年2月）を用いた。

分析方法として、昔話を「動物出現の有無」、「人間出現の有無」、「人間と動物間の変身の有無」に分類し、さらに、主人公は動物か人間か、出現した動物の種類、変身の際の形態、媒介者の有無、変身の理由、人間と出現した動物の関係、出現した動物の形態と役柄などに細分化した。これらから両国の比較を行ったところ、昔話に出現した動物は、日本1,783匹、中国537匹で、種類ごとには哺乳類が最も多く、日本43.0%、中国45.6%となった。

変身譚は「動物から人間へ」、或いは「人間から動物へ」の両方を含め、日本35.9%、中国13.1%と日本が有意に高かった。このうち「人間から動物へ」は日本66.9%、中国54.3%、「動物から人間へ」は日本33.1%、中国21.4%であった。中国の昔話と神話の中には、半人獣からの変身、および、人間と動物がお互いに交換するという独特のものがあつた。また、変身時における媒介者の有無では、日本で「あり」7.6%、中国では17.1%。「なし」が日本92.4%、中国82.9%であった。つまり日中ともに媒介者なしに変身するのが殆どであった。

変身の理由は日中で大きく異なっており、日本では「疎外」21.7%、中国は「韜晦」22.9%が最も多かつた。中国の「韜晦」は、仙人や仙獣が、自分本来の「仙」という非人間的な立場を隠そうとして変身することである。日本の

「疎外」は、仲間に裏切られ、或いは生活に苦しめられたためといった理由で動物に変わるケースである。これも、人間と動物の一体感、また連続性を示すものと思われる。

以上から、両国とも人間と動物との連続性は見られるものの、日本では人間と動物との連続性が強く、中国では、動物との一体感を持ちつつ、倫理面では解説しきれない部分は、仙人或いは仙獣といったもので溝を埋めることにしたと思われ、人間と動物の隔絶感は日本より明確であると思われる。

### 3.2. 輪廻思想から見た動物観

日中韓の一般市民を対象としたアンケート調査結果から、「前世がある」としたのは、日本 82.5%、中国 72.0%、韓国 79.7%と肯定的な回答が多かった。前世に肯定的な意見を持つ回答者を対象に、回答者の前世形態を聞いたところ、日中韓とも「わからない」の割合が最も多く、日本 33.4%、中国 42.5%、韓国 40.6%で、次いで「人」日本 30.3%、中国 19.5%、韓国 39.7%、「動物」日本 21.2%、中国 18.6%、韓国 10.0%となり、3国の順位に変わりはない。

動物を選んだ回答者のうち、日中では多かった動物種の上位3つは同じで、「犬」日本 25.0%、中国 14.6%、「猫」日本 15.4%、中国 14.6%、「サル」日本 9.6%、中国 26.8%で、韓国は「犬」25.0%、「猫」12.5%は同じだが、「鳥」16.7%が2位だった。中国ではサルが最も多いことから、まったく異なる形態の動物に対する連続感は日本と韓国のほうが強いことがわかった。また、来世に肯定的な意見を持っているのは日本 82.0%、中国 67.1%、韓国 76.3%だった。

全体として動物に生まれ変わることを肯定する考えは、日本 73.3%、中国 51.1%、韓国 74.3%で、3国ともに動物への生まれ変わりについて、あまり違和感を持っていないと言える。特に「動物に理由なく生まれ変わる」が日本 68.1%、中国 43.7%、韓国 54.3%と日本が有意に高く、中国より動物との連続感が強い傾向が見られた。また、前世と来世の有無について、男女別に分析したところ、女性の方が輪廻の存在を肯定的にとらえる割合が多かった。

以上から、日中韓ともに輪廻に対して肯定的

な状況があり、人間と動物との隔絶感が曖昧であり、動物との連続性がある点は相似していると言えるだろう。ただし、日本は中韓よりも、やや動物との連続感が強い点が相違している。中国では、中華人民共和国建国から 60 周年を迎えた今日において、共産党が無神論を展開し、現代中国人に多大な影響を与えている中であっても、なお一般の人々の伝統的な観念は大きく変化していないことが分かった。

### 3.3. 愛玩動物に対する動物観

近年、中国では伴侶動物の飼育数が、著しく増加している。2009 年度末現在、中国主要都市で飼育されている犬と猫の総数は約 6,000 万匹に達し、北京市を例にすると毎年 8%増加している。それに伴い、中国においてもペット産業も拡大している。ペットフードの製造販売から、ペット霊園、血統認定所まで広く事業が展開しており、2007 年以降の売上高は毎年 30%増加しており、2010 年に年間 130 億元（日本円約 1,800 億円）に達した。

一方、日本のペット状況をみると、まずペット数は安定的に推移しており、ペットフード協会の調査によると、2009 年度末時点で犬 1,232 万頭、猫 1,220 万頭であった。また、「2011 年版 ペットビジネスマーケティング総覧」によると、2010 年度のペット関連市場規模は、小売金額ベースで前年度比 100.1%の 1 兆 3,794 億円と横ばいであった。こうした背景の中で、日中韓 3 か国の国民は愛玩動物をどのように人間社会に位置付けしているのかを検討した。

まず、動物の嗜好性について、「1：非常に嫌い」から「5：非常に好き」の 5 段階評定尺度で採取した結果、日本は  $4.23 \pm 0.04$  (AV.  $\pm$ SE)、中国  $3.55 \pm 0.06$ 、韓国  $3.82 \pm 0.06$  となり、日本が有意に高い値となった。

飼育状況については、「現在飼育中」が日本 46.9%、中国 19.2%、韓国 21.7%と日本が有意に高く、男女別、年齢別に有意差は見られなかった。

飼育中の回答者に飼育動物種を訪ねたところ、日中の上位3位は、順位にやや違いがあったが、同じ動物種が挙げられた。つまり、日本：「犬」61.6%、「猫」21.1%、「鑑賞魚」16.1%、

表 1. 飼育動物種の出現率（複数回答）

	日本	中国	韓国
犬	61.6%	59.3%	83.1%
猫	21.1%	23.7%	12.3%
熱帯魚	16.1%	37.3%	1.5%
鳥	8.6%	16.9%	3.1%
ウサギ	4.3%	15.3%	3.1%
ハムスター	5.7%	0.0%	10.8%
爬虫類	11.1%	3.4%	0.0%
その他	9.0%	5.1%	3.1%
N数	279	59	65

中国:「犬」59.3%、「鑑賞魚」37.3%、「猫」23.7%となったが、韓国は「犬」83.1%、猫「12.3%」、ハムスター「10.8%」と、観賞魚よりハムスターの割合が高く、また犬で中国と日本より有意に高かった。その他「トリ」、「うさぎ」の飼育では、中国は日韓より高かった。その原因は、1994年までは北京などの都市部では、「食糧に余裕がない」や「狂犬病のコントロール困難」などの理由で、犬を飼うことは禁止されていたことがあげられる。猫や小鳥、金魚などについては飼育が許されていたため、「トリ」、「うさぎ」の飼養率が日韓より高くなったと思われる。

1994年に北京市で登録料5,000元（約7万円）、年間登記料2,000元（約3万円）を払うなどの規定が決定し、原則的に犬の飼育は解禁された。しかし、一般市民にとっては非常に高価なものであった。2003年には規制が大幅に緩和され、犬の登録料は5分の1、登記料は4分の1になった。改革開放政策の成果もあり、生活水準の向上とともに飼い犬の登録数は増加し、北京市で2006年に実施した年度検査では登録犬総数が53万頭に増加した。

表 2. 動物の飼育理由（複数回答）

	日本	中国	韓国
動物好き	68.5%	54.2%	49.2%
かわいい	58.1%	47.5%	49.2%
癒しになる	47.7%	42.4%	26.2%
家族が飼いたかった	35.5%	13.6%	9.2%
ペットが飼える環境になった	14.0%	16.9%	9.2%
家族交流のため	8.6%	3.4%	6.2%
番犬、ネズミ捕り	6.1%	18.6%	7.7%
その他	5.7%	6.8%	6.2%
寂しかった	5.0%	23.7%	9.2%
子どもの教育	4.7%	8.5%	0.0%
N	279	59	65

飼育理由として「動物好き」日本68.8%、中

国54.2%、韓国49.2%、「かわいい」日本58.4%、中国47.5%、韓国「49.2%」、「癒しになる」日本47.7%、中国42.4%、韓国26.2%が最も多く、それ以外の「寂しかった」の項目で中国は日本、韓国より有意に多かった。その理由として、一人っ子政策が実施後30年経過し、一人っ子世代が社会人となったが、仕事のキャリアを最優先するため晩婚化傾向にあり、子供が一人だけの夫婦が、子供代わりにペットに癒しを求めている、さらに、中国社会も高齢化に伴って、年寄りが伴侶動物にも癒しを求めていることなどが、原因として考えられる。また、番犬、ネズミ捕りの項目も中国は日本、韓国より有意に高く、従来の役目を果す目的で飼育している人が中国で多いことがわかった。

現在飼育していない者と飼育経験のない者に理由を聞いたところ、上位3項目は「死別に対する拒絶」日本27.7%、中国21.3%、韓国12.9%、「留守がち」日本21.8%、中国63.5%、韓国33.9%、「旅行などにいけない」日本21.8%、中国23.7%となり、「留守がち」は中国が有意に多く、共働きが一般的であることが原因とみられる。

表 3. 飼育しない理由（複数回答）

	日本	中国	韓国
死別などが嫌	27.7%	21.3%	12.9%
留守がち	21.8%	63.5%	33.9%
ペット飼育禁止の住宅	21.8%	23.7%	17.2%
経済的な余裕がない	16.2%	13.3%	6.9%
家族が反対	13.2%	12.3%	27.0%
特に理由ない	12.5%	7.6%	13.3%
その他	12.2%	3.3%	5.6%
旅行などがしにくい	8.3%	17.1%	6.0%
アレルギー	7.6%	5.2%	7.7%
騒音が気になる	7.3%	6.6%	7.7%
くさい	6.3%	12.3%	10.3%
動物嫌い	5.6%	6.6%	7.3%
高齢になったから	2.0%	2.8%	0.4%
N	303	211	233

ペット、家族、親友などについて、自分との距離を聞いたところ、自分を0とし、全くの他人を10とすると、以下のような結果となった。まず、母が最も近く（日本2.61±0.06、中国2.36±0.09、韓国2.07±0.12）、続いて、父（日本2.98±0.08、中国2.46±0.12、韓国2.28±0.13）、配偶者（日本2.67±0.10、中国2.52

±0.12、韓国 2.39±0.16)、兄弟 (日本 2.99±0.07、中国 2.68±0.11、韓国 2.31±0.12) となり、家族関係はこの順番になった。

表 4. 自分との親近感

	日本	中国	韓国
母	2.61±0.06	2.36±0.09	2.07±0.12
父	2.98±0.08	2.46±0.12	2.28±0.13
配偶者	2.67±0.10	2.52±0.12	2.39±0.16
兄弟	2.99±0.07	2.68±0.11	2.31±0.12
ペット	3.58±0.09	3.98±0.14	4.05±0.17

(本人：0～他人：10 とした 10 段階で回答)

これらの項目はすべて韓国<中国<日本になり、国別に家族との親近感に有意差があった。ペットは、日本 3.58±0.09、中国 3.98±0.14、韓国 4.05±0.17 で、家族よりも有意に遠い位置にあった。しかし国別に見ると、日本は中国、韓国より有意に近く、中韓よりも動物に対し親近感を持っていることがわかった。

次に全員を対象に、犬の飼育場所を聞いたところ、「室内外どちらでもよい」、「室内と室外両方」、「室内のみ」の三項目を選んだ者の合計値は、中国 57.0%、日本 77.1%、韓国 75.7% と、中国は日本と韓国より有意に低い結果となった。前問で飼育理由の中にも、「番犬、ネズミ捕り」と言った項目で、中国が有意に高かったことから、このことは首肯できる。また、日本も韓国も一戸建て住宅が多くみられるが、中国では都市部の住民はほとんどマンション住まいで、自宅に庭などがいないため、室内、室外の感覚が明確ではない。そうしたことから、中国の回答者は、日本や韓国とは室外飼育 (庭などでの飼育) の感覚がやや異なる可能性がある。しかし、日中韓ともに犬が室内にいることに違和感を持たない割合が過半数となった点は、従来犬と言えば番犬であり、室外に鎖でつないでおくことが一般的であった状況が、3 国ともに変化している証左と言えよう。

以上のことから、日中韓の一般市民の愛玩動物の位置付けは、多少の差が見られるものの、その差は急速に縮まってきていると考えられる。その原因は、社会環境の相似性であるだろう。現代社会の老齢化、少子化、晩婚化、核家

族化や、それによる世帯総数の減少など世帯構造の変化の中で、心理的に癒しに対する渴望が強まり、その結果、動物の位置づけが伴侶へと変化したと考えられる。

### 3.4. まとめ

以上から明らかになった点は、①昔話の変身譚からは、両国ともに動物と人間との変身が媒介者なく行われており、西洋に比べ動物との連続感が強いが、日本の方がより強いと考えられる。②アンケート調査による一般市民の動物観では、輪廻について三国とも肯定的な割合が高く、動物への輪廻も否定されていないが、中韓に比べ、日本では動物との連続性がより顕著である。③犬猫に代表されるペットと人との近さは、日本>韓国>中国の順であるが、急速に縮まっていると見られる。

### 参考文献

- 1) 中村禎里「日本人の動物観」出版社：ビイング・ネット・プレス (2006/05)
- 2) 福田あい「日本昔話に出てくる動物に関する研究」日本大学生物資源科学部動物資源科学科 (2001)
- 3) 刘守华「比较故事学论考」出版社：黑龙江人民出版社 (2003/05)
- 4) 石田 おさむ「現代日本人の動物観—動物とのあやしげな関係」出版社：ビイング・ネット・プレス (2008/06)
- 5) 唐克龙「中国现当代文学—动物叙事研究」出版社：南开大学出版社 (2010/01)
- 6) 张光直「中国青铜时代」出版社：三联书店 (1990/05)
- 7) 曼素恩「蘭閨寶錄：晚明至盛清時的中國婦女」出版社：左岸文化事業有限公司
- 8) 石田おさむ、上条雅子、赤見理恵、横山章光、赤見朋晃、若生謙二「日本人の動物観—この 10 年間の推移」動物観研究学会誌 NO. 8(2004/05)
- 9) 依田賢太郎「動物塚建立の動機にみるヒトと動物の関係」動物観研究学会誌 NO. 10(2005/12)
- 10) 瀬戸口明久「害虫・益虫をめぐる動物観」動物観研究学会誌 NO. 10(2005)

